

うした年報活動のため行政的にも優位な立場に立ったことも帝国主義的という非難を招致した理由と見られよう⁵⁰⁾。この点は Karady もデュルケームの活動が文部省においても大きく評価されていたと報じている。

年報がこのようにデュルケーム学派というより彼の社会学の存在意義とその根拠を確立したことは否定できない。それは一面デュルケーム個人の功績でもあり、彼と協力した学派とよばれる人びとの協力の賜物であるが、それは予期されなかった功績というべきであろう。

V 結び

デュルケームが100年前、協力者たちと創設した社会学年報 *L'Année Sociologique* は、非常に大きな衝撃をフランスの社会学界ばかりでなく、広く社会科学全体に対しても多くの影響を及ぼした。Karady が指摘したように、この刊行により、デュルケームの社会学が行政当局に大きな信頼を与えるようになったことは大学における社会学の位置にも好ましい効果を及ぼすことになった。戦後になって比較的早く、Gurvitch の時代にはあるが、パリ大学では社会学は Gurvitch とならんで R. Aron が教授となり、J. Stœtzl は社会心理学の講座を担当するようになり、G. Friedmann は Hautes Etudes で労働史の講座をもち、労働の社会史的研究を担当し Ecole Nationale des Arts et Métier で講義することになるなど、高等教育の分野で大きく勢力を伸ばした。これは第二次大戦後アメリカの社会学による影響も大であるが、基本的には社会学に対する理解と期待が行政当局にあったからと見ることができよう。さらに Les Hautes Etudes en Sciences Sociales における社会科学の拡充、充実にもつながっているものといえるであろう。そして1958年に従来文学部の中であって、社会学科を卒業した人に与えられた licencié des lettres に代わってそれとは独立

の licencié de sociologie が付与されるようになってきたのである。1969年のパリ大学における学生騒動の結果行われた大学改革によって学部 facultés 制が廃止され、UER (Unité d'enseignement et de recherche) の設置に伴ってパリの13の大学に多くの UER が成立し、その中に社会学を中心とする UER が多くできている。それから20年以上を経過した今日ではフランス全体で社会学を中心とする UER はいくつあるのか算えきれないほどである。それらの大学、UER はさらに Cycle du doctorat (大学院コース) をもち、そこで研究者の養成も行われるようになった。このためもあって、社会学の機関誌も増大しているだけでなく、その発行部数も3000部をこえているようである。これらの機関誌は国際的でヨーロッパ各国ばかりか、アメリカ、日本の学者にも投稿の門戸を開き、また特輯号などには外国人の寄稿者を依頼している。筆者の知る限り戦後 Cahiers Internationaux de Sociologie (C. I. S. と略称) について1959年に創刊号を出した Sociologie du Travail (SIT と略す) も1968年と1990年の二回に亘り日本特集号を出している⁵¹⁾。社会学がその成立をオーギュスト・コントの命名によっているところから、社会学をフランス科学であると自認する声は強く、デュルケームも「19世紀における社会学の歴史はフランス社会学の歴史といえる」⁵²⁾ とのべているほどであり、この歴史の伝統を発展させるべくプロシアとの敗戦の直後「ドイツにおける道徳の実証的研究」⁵³⁾ をかいたデュルケームはドイツの社会学の現況を報告して、このままではフランスの伝統が失われると危惧の念を表明していたのである⁵³⁾。その社会学の伝統を守り、その発展に貢献する所の大きかったデュルケームは協力者との協同作業「社会学年報」の刊行によって名実ともにフランス社会学の成立にも主導性を発揮したのである。年報はデュルケームの死後モースの責任の下第二輯を刊行したが、第一次大戦により大きな損害を蒙り、長つづきせず、第三

50) V. Karady 'The Darkheimians in Academe', in Beasnard, *op. cit.*, p. 71-89

51) V. Karady 'The Durkheimians in Academe' in Beasnard, *The Sociological Domain* p. 91

52) デュルケーム「ドイツ論集」小関、山下共訳「報告、ドイツにおける道徳の実証的科学」p. 81-162.

53) Durkheim, 「19世紀における社会学の歴史」拙訳「モンテスキューとルソー」の中に収められている (p. 195-222)。